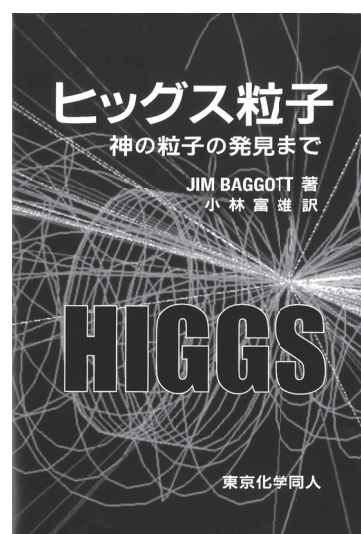


## 書 評

***Social Networking Service* 時代において  
世紀の発見はどのようになされたのか？**

評者 藤本 順平

**ヒッグス粒子  
神の粒子の発見まで**J. Baggott 著/小林 富雄 訳  
出版 2013/09/17  
ISBN 9784807908264  
B6 300頁, 本体 2,300円+税  
(株)東京化学同人

著者のジム・バゴット氏は巻頭の紹介欄によれば、「かずかずの受賞歴を誇るサイエンスライター」とのことで、これまでもいくつかの現代物理学に関する著書で評価を得ているようである。そうした彼であるならば、ヒッグス粒子発見は、まさに是が非でも作品として取りあげたい対象であったであろう。しかし、評者も覚えているのだが、関わっている若い大学院生も顔をひきつらせるようにして、何も知らない、としか伝えてくれなかったほど、2012年の7月4日のCERNのセミナーに向けての情報統制は徹底していた。恐らくバゴット氏も同じ状況にあったであろう。しかし、20世紀までの加速器実験とは全く異なる状況があった。ブロガーの存在である。

本書の最終章は、LHC実験再開の2009年11月から、7月4日のセミナーに向けての実験の推移に当てられている。バゴット氏も関係者あるいは重要な科学者に適宜インタビューを試みたに違いない。いわゆる高エネルギー物理学ブロガーなどのインターネット情報もまた、氏にとって重要な情報源であった。実験グループの内部ノートがブロガーらによってリークされ、ヒッグス粒子が捉えられたかという記事が載り、しかし、その後他のブロガーにより統計のなせる技であったことが報じられるなど、実は、バゴット氏自身が一喜一憂しつつ、CERNからの正式表明を心待ちにしていた姿が伺える。そんな状況が続く、「おそらくは公式には認められない『発見』の宣言、が

ブロガーたちによってなされる」可能性が高まるなか、満を持して7月4日のセミナーが行われたのだ。

本書は物質の根源を探し求め始めた古代ギリシアの時代から、7月4日のセミナーまでの高エネルギー物理学の歩みを扱っている。第一部を素粒子理論の「発明」、第二部を加速器実験による数々の素粒子の「発見」、としてまとめた良書である。ともすれば、今後の展開となる宇宙論や超ひも理論をも詳しく紹介する著作が多い中、本書は標準理論とその拡張の可能性の解説にポイントを絞っている。標準理論に関しては、この一冊で理解が完結するよう企図されている。

バゴット氏は、「発明」や「発見」の当事者である研究者の生の声をできるだけ取材し、それを「出典」とし「参考文献」とは別にして巻末に掲載している。そこでは「筆者への情報」、「筆者との会談」等々、著者の取材力の確かさが裏付けられている。なお訳者は、長年にわたりATLAS実験グループの中心で、研究の推進と指導を行い、まさに最終章のヒッグス粒子発見までの実験の流れを訳すに最も適した当事者のひとりである。また、訳者は二名の共同研究者とともに、ヒッグス粒子発見への貢献により2013年の仁科記念賞を受賞されたことを祝意とともに付記させていただく。

(高エネルギー加速器研究機構 素粒子原子核研究所・講師)